

ALS患者ら強い憤り

嘱託殺人

難病の筋萎縮性側索硬化症(ALS)の女性患者(当時57歳)を殺害したとして医師2人が京都府警に嘱託殺人容疑で逮捕された事件で、ALSの患者らから批判の声が相次いでいる。女性は強く死を望んでいたとされ、ネット上には事件を「安楽死」と結びつけるような意見もあるが、患者らは「困難を抱えた人が生きることに否定につながる」と強い憤りを抱いている。



事件に強いショックを受けたALS患者の一人(提供写真)

筋萎縮性側索硬化症(ALS) 体を動かすための神経に異常が生じ、全身の筋肉が徐々に衰える進行性の難病。体の感覚や視力や聴力、内臓機能などは保たれる。最終的に呼吸

困難になり、人工呼吸器を使わなければ生存期間は2~5年とされるが、個人差がある。原因は不明で、根本的な治療法は見つかっていない。国内の患者数は9805人(2018年度末時点)。

「生きることに否定につながる」

■「なぜ医師が…」

「なぜ人を救うはずの医師が、死の手助けをするのか」。ALS患者で、支援団体「WITH ALS」(東京)の代表を務める武藤将嗣さん(93)は事件に、やり場のない怒りを覚えた。事件では、いずれも医師の大久保倫一(42)、山本直樹(48)両容疑者が昨年11月30日、京都市の女性宅で、女性の依頼を受けて薬物を投与し、殺害したとして、今月23日に逮捕された。2人は主治医ではなく、SNSで女性と知り合ったとみ

「治る希望を」励まされ

女性と交流の患者

女性とツイッターでやりとりしてきた長崎県大村市の平坂貴さん(48)が取材に応じ、女性への思いを明かした。

平坂さんは2年前にALSと診断され、車いすで生活しており、目の動きで操作するパソコンを使って意識疎通している。

まず伝えたいことがある。女性からは「なぜかほかの患者さんには治る希望を持ってほしい。勝手なものですわ」と励まされたという。

平坂さんが女性のつぶやきを見つけたのは昨年2月。平坂さんからメッセージを送り、それ以来、ツイッターで交流を重ねてきた。

女性の投稿が途絶えた昨年12月以降、「もうつぶやかないのですか」とメッセージを送ってきた。

事件2か月前の昨年9月、女性に「自分の未来と重ねてつぶやきを眺んでいる。

「彼女のようになりたいことを、多くの人に知ってほしい」。今はそう願っている。

「尊大な思考」

2006年にALSを死にせよと人工呼吸器を装着する岡部宏生さん(62)は、今回の事件について、10年に相模原市の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で入所者ら45人が殺傷された事件と根は同じと考

殺人罪などで死刑判決が確定した植松聖死刑囚(30)は、「障害者なんていなくない」と暴力的な発言を繰り返していた。岡部さんも、女性のように「死にたい」と考へてきた。それでも、他の患者の懸命な姿を見て「前向きに生きたい」と考えるようになったという。

死になくなるのは仕方がない。しかし、逮捕された医師が、もし女性のためと思っているのなら、植松死刑囚と同じで、尊大な思考だと反発する。

「死にたい気持ちと、生きたい気持ちと同時に存在するの人間。患者の生き方になるのが医師」と語気を強めた。

「倫理背く行為」

ALS協会

今回の嘱託殺人事件で、患者や家族らでつくる日本ALS協会(東京)は27日、患者でもある嘱託患者会長名で「医療倫理に背く行為で二度とあってはならない」とのコメントを出した。

「患者さんが死にたいと関係者に吐露し、依頼することは珍しいことではない。患者さんへの思いや行為を非難することはできない」とした上で、「ALSの進行に対して医療者や福祉関係、支援者が当事者に

寄り添い支援していくことが必要」と求めた。

同日、「(医師の行為は)到底容認できない」とする見解を発表した。過去の判決で示された、積極的安楽死を容認する要件を満たしておらず、「苦痛の救済方法の話し合いが、本人と医療者の間で行われた形跡がない」と批判。同協会は、十分な緩和ケアを受けて自然に迎える死を尊厳死と定義し、安楽死には反対の立場で、「尊厳死と安楽死をはっきりと区別してほしい」とも訴えた。